

2026年4月21日(火) イヴ・アンリ レクチャーコンサート
ショパンがドビュッシーにインスピレーションを与えたとき
「感情の表現から音の印象主義へ」

ピアノ：イヴ・アンリ

翻訳：元呑千香子

コンサート通訳：西原 侑里

ドビュッシーの音楽は、ロマン主義の音楽とは一線を画すものとして一般的にみなされています。ドビュッシーといえば「印象主義」という言葉を思い浮かべますが、その発端は絵画における「印象派」です。1877年に「印象派」運動を始めたモネ、ルノワール、ベルト・モリゾといった画家たちの作品が「印象派」と定義されました。この表現はクロード・モネが1872~73年に描いた作品「印象・日の出」が由来となっています。

その一方で芸術の歴史には断絶と同時に継続性も存在します。ロマン主義の最中、ショパンの音楽は唯一無二の個性と普遍的な表現を兼ね備えていました。聴いた瞬間にショパンだと分かる個性があると同時に、全ての人間に訴えかけてきます。ショパンの音楽の特徴でドビュッシーに深い影響を与えた大事な要素の一つ、それは色彩感覚の探求です。ショパンは画家ウジェーヌ・ドラクロワと友達であり、ドラクロワは絶妙な色彩を駆使してショパンの最も有名な肖像画を描きました（ショパンの肖像画のなかでは最も写実性に欠けませんが）。ショパンとドラクロワが絵画・音楽における色彩感覚の活かし方について意見交換していたことは、彼のピアノ作品においてそれが主たる関心事のひとつだったこと示しています。音楽における色彩の探求はとりわけペダルを用いてピアノの全音域を活用する新しい手法に表れています。ペダルで異なる音域を融合させ、あらゆる絶妙な響きのニュアンスをピアノから引き出したのです。ショパン以前にはこの様にペダルを使う者はいませんでした。

ドビュッシーはショパンの弟子であったモーテ・ド・フルールヴィルからピアノの手ほどきを受け、ショパンの響きのルーツに触れて育ちました。ドビュッシーはこの初期の音楽的アプローチから、ペダルで倍音を重ねて生まれる調和と豊かさを持つ「美しい音」の概念を持ち続けました。彼は初期にはロマン主義に根ざしていましたが（一時はワーグナーに傾倒するほど）、徐々にロマン主義の音楽特有の感情の表現に背を向け、イメージと色彩の描写へと至り、それが「印象」という表現に帰結されます。この「感情から印象へ」の移行は絵画で印象派の運動が発生したのと全く同時期でした（絵画における印象派運動と同時期に発生しました）。1880年代の終わりに書かれたドビュッシー最初の作品群はクロード・モネの「印象・日の出」からわずかに数年後に書かれ名実ともに印象主義といえますが、彼の主要な傑作である映像や版画、前奏曲集などが生まれたのは20世紀初頭になってからのことでした。

今夜のプログラムではショパンのロマン主義の世界とドビュッシーの印象主義の世界を、両者の作品を組み合わせることで、その結びつきをご紹介します。作品の表現内容の比較ではなく、ショパンのピアノ書法がドビュッシーに与えた影響を示していきます。

二人の作曲家のペダルの用法、色彩（音色）の探求、ピアノの全音域の活用、そしてショパンが開拓した手法をドビュッシーが極限まで発展させたことが比較の核心となります。

ドビュッシー 「月の光がふりそそぐテラス」 （前奏曲集第2巻より第7番）

ショパン ノクターン op.62 ロ長調

初めに、夜の雰囲気共通要素である2曲を取りあげます。ドビュッシーの前奏曲集第2巻より第7曲「月の光がふりそそぐテラス」と、ショパンのノクターンとしては最後から2番目に書かれた op.62-1 (1846年にノアンで作曲) です。

「月の光がふりそそぐテラス」の雰囲気を司る神秘性は曲全体を通して続き、ペダルと様々な音域を活用して、見事な音響効果を生み出しています。ショパンのノクターンにおいても幅広い音域が使われており、対位的、そして音響効果の点でも円熟期の傑作のひとつです。後半に冒頭のテーマがトリルで再現され、「光の輪 (ハロー)」のような効果を生み出しており、これは写実性よりも印象を重視する印象派の画家の手法に例えることができます。近くで見るとぼやけているが、遠くから見ると生き生きとして見えるのです。

ドビュッシー 「葉ずえを渡る鐘の音」 (映像第2集より)

ショパン 24の前奏曲 op.28より 第3番ト長調・第4番ホ短調

次にドビュッシーの「映像第2集」から「葉ずえを渡る鐘の音」と、ショパンの24の前奏曲 op.28より第3番ト長調と第4番ホ短調です。

「葉ずえを渡る鐘の音」ではピアノをまるでオーケストラの様に響かせ、多彩な音色と音響効果で絵画的な世界が湧き上がる印象主義の創意溢れる傑作となっています。ショパンの前奏曲第3番は明るく喜びに満ちた雰囲気、流れの早い小川のきらめきを思わせる左手の動きに右手で躍動感あふれるモチーフが加わります。一方第4番では半音階で下降する左手の和音に右手でモノトーンなメロディーが重ねられ、これは後にドビュッシーの前奏曲「雪の上の足跡」の創作に影響を与えました。

ドビュッシー 「そして月は廃寺に落ちる」 (映像第2集より)

ショパン 前奏曲 op.28より 第6番ロ短調・第13番嬰へ長調

同じくドビュッシーの「映像第2集」より「そして月は廃寺に落ちる」です。これはドビュッシーの作品のなかでも最も神秘的な曲です。時が止まったかのような遠い古代を思わせ、聴き手は生命の痕跡を見いだすことを願い彷徨うような感覚になります。この曲をショパンの前奏曲 op.28 の第6番・第13番と組み合わせるのは静けさ、そしてじんわりと過去を思い出すような共通する雰囲気があるからです。第6番はノスタルジックな雰囲気、そして第13番は家族との懐かしく幸せな思い出のようです。

ドビュッシー 「金色の魚」 (映像第2集より)

ショパン 舟歌 op.60 嬰へ長調

続いて密接に関係のある2曲。ドビュッシーの映像第2巻の終曲「金色の魚」とショパンの作品の中でも非常に有名な舟歌 op.60 です。

「金色の魚」は屏風に描かれた金色の大きな魚からインスピレーションを得ており、舟歌はヴェニス gondola をイメージさせ、どちらも水にまつわる共通要素がありながらそれを超える重要な点があります。それはドビュッシーの尽きることのないアイディアによるショパンへの密かなオマージュとなっている点で、これこそ私がこの2作品を結びつけた理由です。ドビュッシーの作品の冒頭では穏やかで滑らかに流れる水のざわめきを両手で奏でながら始まります。続いて並んで泳ぐ2匹の金色の魚による2声のメロディーが現れます。ショパンの舟歌では短い下降型の前奏の後にドビュッシーと全く同じ音を用いた左手の動きが始まります (ショパンのソ#がドビュッシーではソのダブル#に置き換わっています)。この規則的とも不規則的とも言える音型は船頭がオールで gondola を前進させる動きを表し、続いて船頭による2声の歌が右手で奏されます。これらの類似が意図的であることは明白で

しょう！ドビュッシーはこうして曲の出だしで舟歌の印象主義的で描写的な手法と調性を模倣し、精通する耳を持った人だけが隠れたオマージュと憶測出来るように仕掛けたのです。両者ともに絵画的・色彩的な感覚と驚くべき豊かさを持つピアノ音楽のクリエイターであり、両作品ともにピアノ作品の傑作です。ここまでの探求でショパンがロマン主義において最も重要で影響力のある作曲家の一人であり、また最初の印象主義の音楽家の一人であったことが分かります。

ドビュッシー 「ロマンティックなワルツ」

ショパン ワルツ op.70 へ短調

ここで時代を少し遡ります。ドビュッシーの「ロマンティックなワルツ」とショパンのワルツ op.70 へ短調です。「ロマンティックなワルツ」ではドビュッシーのルーツがロマン主義であること、そして誰もが認めるワルツの巨匠であるショパンへのオマージュとして作曲したことが分かります。2 曲ともノスタルジックなワルツです。ドビュッシーのワルツではその終焉も見届けたロマン主義時代へのノスタルジーを、後に活躍した新しい音楽の時代から見ています。対してショパンのそれは、フランスで妹と義理の弟と束の間の再会を果たしたものの、人生の大半を祖国や家族と離れていたためにショパンによく見られる哀愁です。再会の後に再び悲観的な気持ちになったショパンは、ノアンから家族にあてた手紙のなかで抑制を効かせながらも吐露しています。「窓の外から家の前を通る馬車の音が聞こえるのだが、あなたたちを降ろすために止まってくれないものか。」

ドビュッシー 練習曲「組み合わせされたアルペジオのための」

ショパン 練習曲 op.25-1 変イ長調

ドビュッシーのショパンの音楽に対する熟知は、ポーランドの巨匠の音楽的遺産を発展させたドビュッシーの才能と同じく相当なものでした。

ドビュッシーの「組み合わせされたアルペジオのための」とショパンの op.25-1 の練習曲を聴き並べると、ドビュッシーとショパンを結ぶ点、そしてドビュッシーのピアノ書法における独自の天才性が分かります。説明するまでもなく聴けばお分かりになるでしょう。因みにドビュッシーの「12 の練習曲」はショパンに捧げられています。

ドビュッシー 「ヒースの茂る荒れ地」(前奏曲集第 2 集より第 5 番)

ショパン 幻想ポロネーズ op. 61 変イ長調

最後に次の 2 曲でショパンとドビュッシーの並行する世界の探求を締めくくります。ドビュッシーの前奏曲集第 1 巻より 5 曲目「ヒースの茂る荒れ地」と 1846 年にショパンが最後のノアン滞在中に作曲し、ショパンにとって最後の大作である幻想ポロネーズ op.61 です。この 2 曲は形式的な点において共通点はありません。「ヒースの茂る荒れ地」は短い曲であるのに対し、幻想ポロネーズはショパンの単一曲としては最も長い作品の一つです。この 2 曲を結びつける共通点は溢れ出る自由さと即興性です。そして作曲家ドビュッシーとショパンの芸術において最も特徴的なこと、それは彼らの作品は膨大な仕事と完全なる作曲技法の産物であることを聴き手に忘れさせることです。両者の作品は共に全てが新しく、ごく自然に生み出されたかの様に感じられます。両者は異なる音楽言語を用いながらも、普遍的なメッセージを音楽で伝える才能を共有しています。ショパンにおいては「人間の感情」という普遍性、ドビュッシーにおいては「印象」という普遍性を。ショパンとドビュッシーは共に我々の感性に訴えかけ、自身の内なる探求に耳を傾けさせることで音楽的視野を広げ導いてくれるのです。